〈 中学校国語部会 〉

研究主題

「読むこと」の領域における効果的な指導法の工夫

－ 個に応じた指導の評価と充実について －

研究の概要

本部会では、共通主題「学習指導要領の『基準性』を踏まえた個に応じた指導の充実」に基づき、研究主題を上記のように設定し、授業改善に向けて研究を進めてきた。

学習指導要領の一部改正において、学習指導要領に示されている内容等を全ての児童・生徒に確実に指導した上で、児童・生徒の実態を踏まえ、学習指導要領に示していない内容を加えて指導できることが明確にされた。こうした考え方に対応するためには、従来のどの生徒にも同じ学習課題や学習過程を課する指導法から脱却し、個に応じた指導の充実を工夫する必要がある。

Ⅰ　研究の目的

習熟度別学習を必修教科の一斉授業においても積極的に取り入れることが重要であると考え、個に応じた指導の在り方を探る。

Ⅱ　研究の方法・内容

1　生徒の学習状況の把握

学習活動を始める前に、学習目標や内容に関する個々の生徒の実態を把握することにより、学習目標を達成するためのより有効な手だてを講じることができる。また、生徒自身も自分の学習の実現状況を把握して、取り組むべき課題に対する具体的な手だてを意識することができる。

2　ねらいを明確にした授業の実践

学習を通して身に付けさせたい力を明らかにし、学習の目標や内容を設定する。また、その目標を達成するため、個々の生徒がどのような学習活動を行うかを明確にする。これらを生徒へ提示することにより、学習活動に対して課題意識をもって取り組ませることができる。

3　評価の目的の明確化

学習過程において、目標に対する生徒一人一人の学習の実現状況をとらえる評価が大切である。しかし、１時間の授業において、あまりに多くの評価場面や方法を設定し、指導がおろそかになっては本末転倒である。そこで、単元や１時間の評価のねらいを明確にして、その目的に応じた評価計画を立てて評価することとした。個々の生徒の学習の実現状況を把握し、その評価結果を個に応じた指導に生かすとともに、生徒一人一人がその評価結果を振り返り、次の学習に生かしていくような指導の工夫が大切である。

4　個に応じた指導の充実

習熟の程度に応じた学習過程を通して、学習の目標を達成できるようにする。生徒の力をＡ（発展的に自ら取り組める）、Ｂ（標準的な手だてで取り組める）、Ｃ（補充的な手だてによって取り組める）に分け、それぞれの習熟の程度に応じた方法で課題に取り組ませ、学習の目標を達成できるよう工夫した。

◇ 指導事例１【説明的文章】

(1) 教材名　『モアイは語る－地球の未来－』　安田善憲　作　（光村図書　第２学年）

(2) 研究の方法

説明的文章の学習では書き手の論理展開を的確にとらえ、内容を理解して自分の考えをもつことが目標となる。しかし、実態調査の結果では苦手意識をもつ生徒が多く、その原因の一つとして自分の力で教材を読み学習を完結したという達成感をもちにくいことが考えられる。そこで、**論理展開の把握の仕方**、**内容理解のための手だて**、**習熟の程度に応じたワークシート**、**実態把握に基づく展開**について工夫を行い、指導法の改善を図った。

(3) 授業計画（７時間扱い）

○状況把握のための評価　★個々の生徒に返す評価　△個々の生徒の状況把握のための評価

次	時数	学習活動	評価方法
第１次	２時間	・学習目標を知り、「モアイ」について知っていることをあげる。 ・教材文を意味段落ごとに分けたワークシートで、新出漢字や難解語句を確認しながら、範読を聞く。 ・それぞれの意味段落に合う小見出しを選択する。 ・第１段落から論の進め方の概略をつかみ、６つの意味段落を正しく並び替える。	○発言 ★ワークシートⅠ ★ワークシートⅡ ○観察
第２次	２時間	・全文を読み、初めて分かったこと、疑問点、感想などを学習プリントに記入する。 ・それぞれの意味段落で、筆者が問題としてあげていることをとらえ、その答えになっているところに線を引く。 ・要約する上での注意すべき事項をあげ、その説明を聞く。	★ワークシートⅢ ○観察 ○発言
第３次	２時間	・第１段落の要点を確認しながら、要約文にまとめる。 A　キーワード・キーセンテンスをとらえながら、自分の力で要約文にまとめる。 B C　ワークシートを活用して要点を確認した後、それを参考に、要約文にまとめる。	○観察 △ワークシートⅣ A～C
第４次	１時間	・「イースター島」と 現代の「地球」を比較し、筆者が述べたかったことをとらえ、それに対する自分の考えをまとめる。 ・まとめたことを発表し、意見を交換する。	★ワークシートⅤ ○発言、観察
第５次	１時間	・参考資料を読み、「モアイは語る」と比較し、さらに詳しくわかったことをまとめる。 ・さらに知りたいことや調べたいことをあげ、それについての資料を集め、まとめる。	★ワークシートⅥ

(4) 指導法の改善の工夫

①論理展開の把握のための工夫　→　ワークシートⅡ

説明的文章の学習において、形式段落をとらえてから、意味段落を考え→小見出しをつけ→要旨をつかむという取組が一般的である。本教材では、小見出しがついているので、意味段落と小見出しを生徒が組合せた後、順不同に提示していた意味段落を正しい順に並び替えさせた。小見出しと意味段落が提示されているので、生徒は意欲をもって取り組み、論理の展開を十分

考えてとらえることができた。

国語科学習プリント

「モアイは語る」―地球の未来―

二年　組　番（　　）

一　A～Fの意味段落にの小見出しとして、適当なものを次から選び、記号で答えましょう。

ア　少年の夢
イ　モアイはだれが作ったのか
ウ　モアイはどのように作られ、運ばれたのか。
エ　イースター島はヤシの森に覆われていた
オ　文明はなぜ崩壊したのか
カ　モアイは明日の地球を予言している

A（　　）B（　　）C（　　）
D（　　）E（　　）F（　　）

二　A～Fの意味段落を正しい順序に並び替えましょう。

A → □ → □ → □ → □ → F

三　「モアイは語る」を読んで初めて分かったこと、疑問に思ったこと、考えさせられたことはどんなことか。

②内容理解のための手だての工夫

内容理解の手だてとして要約文を書かせることとした。その前段階として、キーワード、キーセンテンスをとらえさせるために、小見出しと問題提起に対する答えの部分に注目させた。

まず、小見出しの文言について触れられている部分に、小見出しごとに線種を変えて傍線を引かせ、その後、問題提起の部分を押さえ、その答えの部分に傍線を引かせた。また、要約をする上での注意やなぜ要約が必要なのか等の説明をし、目的意識をもって取り組ませるようにした。

③習熟の程度に応じたワークシート工夫　→　ワークシートⅣ

要約文にまとめる力は、生徒によって差があることから、習熟の程度に応じたワークシートを３種類用意した。

【Ａコース】……自分の力で要約していくためのもので、意味段落ごとに２００字のマス目を作り、１００字目がわかるようにした。

【Ｂコース】……まず内容把握ができるよう要点をまとめるための穴埋め式問題をしてから、それらと本文を参考にして【Ａコース】の要約ができるようにした。

【Ｃコース】……【Ｂコース】の穴埋め式問題をしてから、それらと本文参考にして、要約文も穴埋め式で完成するようにした。

生徒に、自分の習熟の程度に応じたワークシートを選択させることがポイントとなるので、まず全員で【Ａコース】のワークシートを使って第１段落の要約を行った。その結果、自分の習熟の程度に合ったワークシートを選択させ、学習するように配慮した。その際、選択に迷っている生徒には、適宜アドバイスを行った。生徒がワークシートを選択した後は、きめ細やかな個別指導が必要なので、丁寧な机間指導を心がけた。

④実態把握に基づく展開の工夫

・一斉授業の中で、数種類のワークシートを活用して、個に応じた指導を行う際は、生徒の実態把握が特に重要になってくる。そのため、既習教材を使った説明文の読み取りに関す

るプレテストを実施し、その結果をもとに授業を構成した。

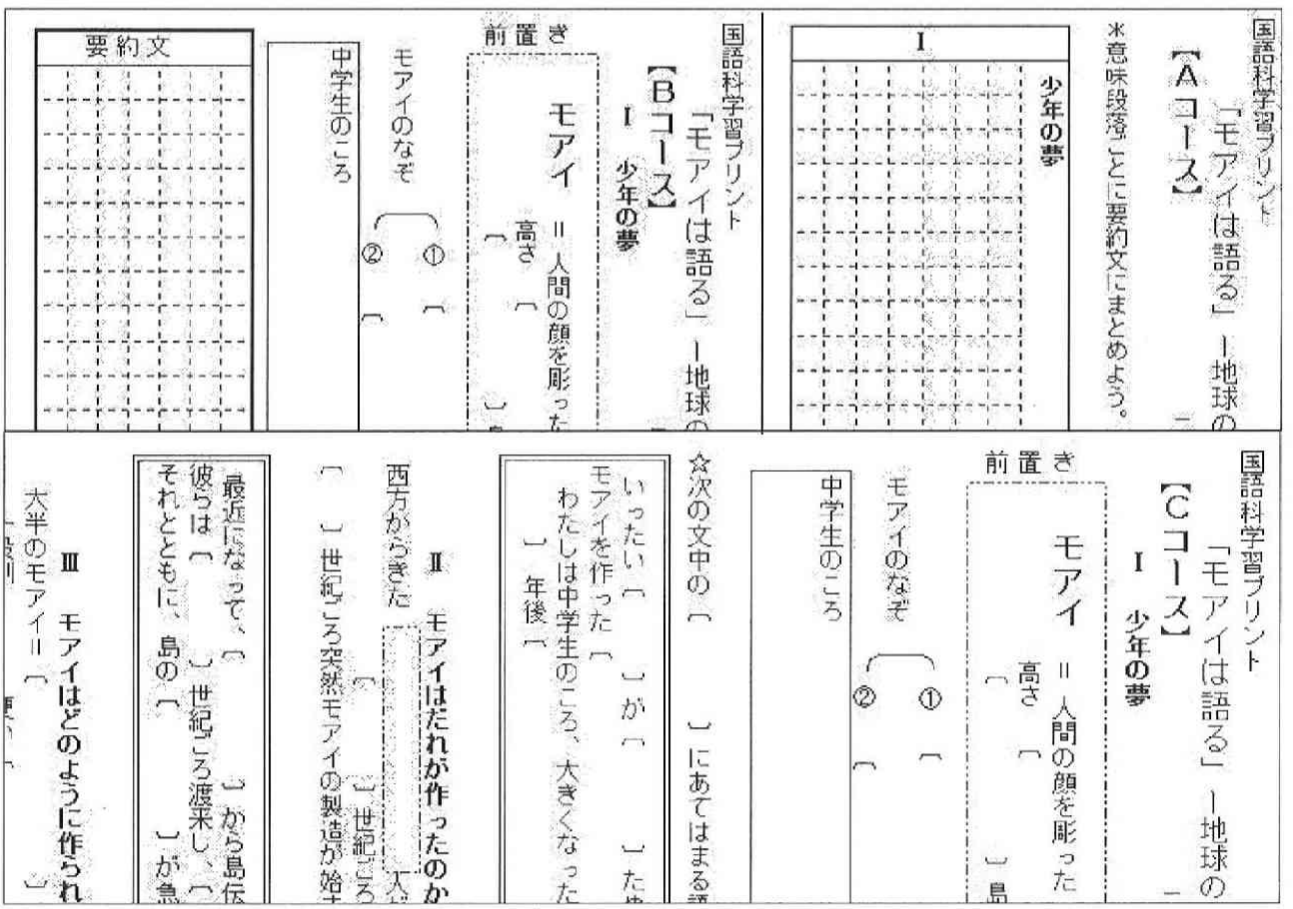
・ワークシートを選択させる際は選択の基準を明示し、それに従って生徒が自分の習熟の程度に応じたワークシートを選択できるようにした。また、生徒の選択が習熟の程度に応じているかを机間指導を通して確認し、習熟の程度に合わない選択をした生徒にはより力を伸ばせるよう適切なワークシートを提示した。

(5) 授業実践例

過程	学習活動	指導内容	○ 指導上の留意点 ● 評価の観点	A・Cの生徒への手だて
導入 (5分)	・本時の学習の見通しをもつ。	・本時の学習内容を示す。	○学習の目標と方法を概括的にとらえられる。	
展開 (40分)	・要約文のまとめ方について説明を聞く。 ・第１段落の要約文を書く。 ・教師の説明を聞き、習熟の程度に応じたコースを選択する。 ・第２段落から第３段落までを要約文にまとめる。	・要約する上での注意事項を説明する。 ・全員でＡコースのワークシートに第１段落の要約文を書かせ、どの程度できたか確認させる。 ・Ａ・Ｂ・Ｃ各コースの内容を説明する。自分の習熟の程度にあったコースを選択させる。 ・コースを選択させた後、第２段落から第３段落までを要約文にまとめさせる。	○要約上での注意事項 ＊以前に引いた傍線の部分がキーワード・キーセンテンスである。 ○コースの選択は以下をめやすとする。 **【Ａコース】** 「モアイのなぞ」「大きくなたら…」が含まれ、１００字以内でまとめてある。 **【Ｂコース】** 上記のことが抜けているか、または、「モアイの説明」が入っている。字数が１５０字以上でまとめてある。	・選択に迷っているＣの生徒には、選択についてのアドバイスを与える。
	Ａ ・意味段落の小見出しを参考にしながら、それぞれの段落のキーワード・キーセンテンスをさがす。それを使い要約文にまとめる。	・キーワード・キーセンテンスをとらえさせながら、自分の力で要約文にまとめさせる。	○各段落のキーワードに注目するよう指示する。 ●キーワード・キーセンテンスをとらえ、簡潔に要約文にまとめることができたか。 ＜要約文＞	・Ａの生徒へ１００字程度を意識させ、簡潔な表現でまとめるよう指示する。
	Ｂ ・ワークシートに要点を書き込む。そのワークシートを参考にし、要約文にまとめる。	・各意味段落の要点が押さえられるワークシートに取り組ませ、書き込んだ要点をキーワード・キーセンテンスとして要約文にまとめさせる。	●学習プリントに要点を書き込むことができたか、それを参考にしながら、簡潔に要約文にまとめることができたか。 ＜ワークシート＞ ＜要約文＞	・Ｃの生徒へ各段落の重要語句を一緒に確認し、要点をまとめる。

	C	・各意味段落の中で重要な語句を確認し、ワークシートに記入し、要約文を完成させる。	・重要な語句を教科書の中から見つけ記入し、要約文が完成できるワークシートに取り組ませる。	●重要な語句を教科書中からさがし要約文が完成できたか。 <ワークシート>	・Cの生徒へ適宜アドバイスをし、要約文を完成させる。
まとめ (5分	・本時の授業について振り返らせ、次時の学習の見通しをもたせる。		・教師の説明を聞き、次時の学習の内容について確認する。	●各段落の要点を意欲的にとらえ要約文にまとめることができたか。	

≪参考資料　ワークシートⅣ－Ａ・Ｂ・Ｃ≫


国語科学習プリント
「モアイは語る」－地球の
【Aコース】
＊意味段落ごとに要約文にまとめよう。
Ⅰ　少年の夢
Ⅰ
国語科学習プリント
「モアイは語る」－地球の
【Bコース】
Ⅰ　少年の夢
前置き
モアイ　＝人間の顔を彫った
高さ〔　　〕
モアイのなぞ
①〔　　〕
②〔　　〕
中学生のころ
要約文
国語科学習プリント
「モアイは語る」－地球の
【Cコース】
Ⅰ　少年の夢
前置き
モアイ　＝人間の顔を彫った
高さ〔　　〕
〔　　〕島
モアイのなぞ
①〔　　〕
②〔　　〕
中学生のころ
☆次の文中の〔　　〕にあてはまる語
いったい〔　　〕が〔　　〕た
モアイを作った〔　　〕
わたしは中学生のころ、大きくなった
〔　　〕年後〔　　〕
Ⅱ　モアイはだれが作ったのか
西方からきた
〔　　〕世紀ごろ
〔　　〕世紀ごろ突然モアイの製造が始
最近になって、〔　　〕から島伝
彼らは〔　　〕世紀ごろ渡来し、〔
それとともに、島の〔　　〕が急
Ⅲ　モアイはどのように作られ
大半のモアイ＝〔　　〕

(6) 生徒の変容

≪「モアイは語る」要約文作成における生徒たちの変容≫

「プレテスト」における実態調査の評価	「モアイは語る」要約文作成	
	開始時使用ワークシート	記入終了時評価
【A】　3名	【Aコース】　3名	【A】　3名
【B】　19名	【Aコース】　12名	【A】7名【B】4名【C】1名
	【Bコース】　6名	【A】3名【B】3名【C】0名
	【Cコース】　1名	【B】1名
【C】　13名	【Aコース】　6名	【A】1名【B】1名【C】4名
	【Bコース】　2名	【A】1名【B】0名【C】1名
	【Cコース】　5名	【B】5名

＊ 実態調査で【B】【C】だった生徒で、【Aコース】を選択し、授業終了後の評価が【C】

となった生徒には、次の授業（第４次）に入る前に授業時間外で【Ｂコース】または【Ｃコース】のワークシートに取り組ませたところ、【Ｂ】の段階になることができた。

≪学習を終えての生徒の感想≫

【Ａコース】を選択した生徒

・最初はキーワードが見付けられても余分な言葉を省くことができず、要約文が長かった。しかし、学習を進めるうちに不要な部分が分かってきて、短い要約文が書けるようになった。要約文にまとめることで、筆者の伝えたいことや大切なところが明確になるため、文章を理解するには一番良い方法だと思った。

・キーセンテンスを探したので、【Ａコース】でも迷わずに書けた。自分の出来具合に合ったワークシートが選べて学びやすかった。

【Ｂコース】を選択した生徒

・最初、全員で【Ａコース】を使って書いたときは、不要な部分を入れたり、要約の仕方が十分分からなかったりした。しかし、【Ｂコース】を使ったら、徐々に大切なところや要約の仕方が分かるようになった。今度は、おそらく【Ａコース】を使ってもある程度はできると思う。

・要約文を書く前に穴埋め形式で、その段落についてまとめを書いた。その学習の後に、自分で要約すると分かり易かった。

【Ｃコース】を選択した生徒

・以前は、一斉に要約する学習を行っていたので、あまり理解できていなくても何となくやっていて、時にはみんなが言っていることを写すだけだった。自分で考えるというのではなかったので、あまりできなかった。しかし、Ａ・Ｂ・Ｃに分かれて自分でやることができたので、少しずつ要約がしやすくなった。

(7) 考察

これまでも、一斉指導の中で、個に応じた指導を行うためのワークシートを習熟度別に複数用意することはよく行われていた。しかし、授業の中で生徒自身が習熟の程度に応じたワークシートを適切に選択することは十分ではなかった。そこで、今回はプレテストを行うことと、生徒が習熟の程度を適切に判断できる基準の提示や資料の作成を行った。生徒は、習熟の程度に応じたワークシートを選択すると、学習意欲を高め、自ら進んで学習に取り組み、学習段階に合った達成感を得ることができるため、継続してワークシートに取り組むことができるようになった。また、教師が机間指導を丁寧に行うことにより、一斉指導においても、個に応じた指導が行えるようになった。

習熟の程度を生徒自身が判断するためのワークシートの作成は、生徒の実態を把握するための様々なデータが必要なため、今後も研究を進めていくことが必要と考えられる。

◇ 指導事例２【文学的文章・小説】

(1) 教材名　『空中ブランコ乗りのキキ』　別役　実　作　（三省堂　第１学年）

(2) 研究の方法

小説の学習においては、登場人物の人物像の読み取りと作品の基本的な構造を理解し、内容や表現を味わって自分の考えをもつことが目標となる。第１学年であるので、**小説の要素を理解して読み取ることを通して、作品全体を貫いている物語性を読み取る**ことを目標とする。また、生徒の実態に応じた**補充的な学習と発展的な学習を明確にした授業の在り方**を工夫する。さらに、**学習活動に応じた評価の目的を明確**にし、それに見合った評価方法を取り入れる。

(3) 授業計画（５時間扱い）　□内は補充的学習が必要な生徒への援助の手だて

○状況把握のための評価　★個々の生徒に返す評価　△個々の生徒の状況把握のための評価

	学　習　活　動	評　価　基　準		評価方法
		十分満足（A）	おおむね満足（B）	
第1時	・作品通読、漢字・語句学習 ・次回学習(小説の四要素＝時や場･人物やできごと)への準備	・漢字学習、語意の文脈上学習の工夫	・漢字学習法がわかり語意をまとめられる	★ワークシートⅠ・Ⅱ
		漢字筆順や楷書・辞書活用法を指導。		
第2時	・小説の要素(時・場・人物)ごとに構造の読み取り。ワークシートⅢ ・班内・全体の読み取り交流 ・板書で物語全体確認。 ・人物像読み取りのワークシートⅣ ・次回二・三の場面でのコース別学習の予告	・小説の要素と構造の関連に気付く。	・小説の構造をまとめられる。	○発言 ○観察 △ワークシートⅢ・Ⅳ
		時・場・人物・できごとのいずれかを基にしてまとめていけるよう助言。		
		・10中７以上が一致⇒次回発展コース	・10中5～6が一致⇒基礎・発展を各自選択	
		10中４以下の生徒は、人物像読み取り再確認の基礎コースに。		
第3時	・二・三（P116～P118・L8）で「キキ」の人物像読み取り。 ・人物像の班内話し合い→発表 ・次回は四の予告と宿題提示 四の人物像読み取り上最も大切な箇所に傍線を引く。	・人物像と根拠となる表現をまとめられ、発表できる。	・場面ごとの人物像と根拠となる表現をまとめられる。	○発言 ★ワークシートⅣ
		「キキ」と他の人物の対比・会話での多用語などを参考に読む方法を助言。		
第4時	・四（P118・L9～P 123・L 5）キキの人物像を班で読み取る。ワークシートⅤ ・各班の発表とまとめ	・班の中で様々な意見を述べる。	・自分の読み取りを発表できている。	○発言 ★ワークシートⅤ

第5時	・5 (123・L6～終り)ワークシートⅥでキキの人物像と作品に貫かれているテーマについて意見交流。班・学級全体。 ・小説の読み取りについて学習したことをまとめる。ワークシート全てを活用する。	・人物や情景などの表現を作品全体と関連付けまとめる。 人物の行動表現に着目させ、その意味を考えられるように助言。 ・作品部分と全体を関連付けて発表。 おもしろいと感じた内容や表現の明確化とその根拠が認識していけるように助言。	・キキの人物像を表現に即してまとめる。 ・表現に即し感想をまとめる。	○発言 ○自己評価 ★ノート ★ワークシートⅠ～Ⅵ

(4) 指導法改善の工夫

①小説の要素と構造を読み取らせる工夫　→　ワークシートⅢ（省略）

小説の構造をとらえさせる要素としては、時・場(場面や舞台となる土地)・人物・できごとなどから読み取らせるようにした。それらが絡み合うことを念頭に置いて全体をいくつかに分けさせて読み取る力をつけていく。

②補充的な学習と発展的な学習の展開の工夫　→　ワークシートⅣ⇒ワークシートⅤ

ア　コース別ワークシートの工夫

小説の最初の場面で主人公キキの人物像が読み取れる箇所として 10 か所に傍線を引かせた。読み取れた程度により、五つに分けた二・三の場面での読み取り学習のワークシートを生徒に選択させた。授業計画に示した目安を提示し、それをもとに基礎・発展のワークシートを生徒が選択して取り組んだ。全部をコース別にするのではなく、四の場面の読み取りの後半では、各コースの読み取りが生かせるように班学習や発問を工夫した。

国語ワークシートⅣ

一年　組　番・氏名

★P114～115で、キキの人物像が読み取れる表現に線引きをしてみよう。線を引くのは十か所にしぼりこみ、一か所につき、10文字以内で引いてみよう。

そのサーカスでいちばん人気があったのは、なんといっても、空中ブランコ乗りのキキでした。サーカスの、大テントの見上

国語ワークシートⅤ　**基礎**

★今回は二と三の場面でキキの人物像を読み取ります。次の問に一つずつ答えてみよう。

二・三の場面（P116～P118・L8）

①P117・L4「四回宙返りをしなければならないのだろうか……。」の「……。」に入るべきキキの言葉を考えてみよう。

国語ワークシートⅤ　**発展**

人物像の読み取り　②『空中ブランコ乗りのキキ』

一年　組　番・氏名

★今回は二・三の場面で「キキ」の人物像が読み取れるところに線引きをしてみよう。線はそれぞれ三か所にしぼり、読み取れる人物像を次の表にまとめてみよう。

イ　人物像を読み取る指導の工夫

人物像を読み取る方法を提示し、ワークシートを次の観点（a～g）で作成した。

どこに線引きをすべきか（人物像の読み取りで注目させるべき点）

⇒印は読み取る内容。　※印は補充的な指導を受けた生徒の様子。

a　人物の行動描写とその前後　【例】キキは黙ってぼんやりと海の方を～まもなく振り返ってほんのちょっとほほえんでみせると、そのままゆっくり歩きはじめました。（P121・12～P122）　⇒おばあさんの言葉に迷いはじめるが、少しばかりの幸せ(盛大な拍手)のために四回宙返りへ向けて行動を起こすキキ。

※補充的な指導を受けた生徒は、傍線を引く観点を助言されたことにより、ワークシートで人物像が読み取れるようになった。

b　会話文の一部　【例】「いつか、だれかがやりますよ。」（P116・5）⇒漠然とした不安。

c　心情の直接表現の前後【例】「きっと寂しいことだと思うよ。」（P118・6）⇒人気が落ちることを、まだ経験していない。

※補充的な指導を受けた生徒は、最初は心情表現にのみに注目して表現の深さに気付かなかったが、周辺の単語から読み取れるようになった。

d　特別な表現（普通とは違った表現）【例】鳥みたい　ひょうですね　お魚

⇒人間離れした技の持ち主。【例】「四回宙返りをしなければいけないのだろうか……。」（P117・4）⇒不安、心配、迷い、戸惑い。

e　文末表現【例】練習をしてみました。（P117・6）⇒練習に挑戦しているキキの姿。

【例】海の方へ飛んでいったといいます。（P126・9～10）⇒伝え聞く内容。

※補充的な指導を受けた生徒は、文末を比較して考えるようになった。

f　呼称【例】キキ⇒単純な音の繰り返し。鋭い音。緊張感のある音。人物像がよくわからず特徴がない。

g　色彩表現【例】澄んだ青い水（P123・1）⇒きれいだが、冷たい。白鳥のように

【例】白い魂（P124・9～11）⇒純粋、汚れていない。色がない。迷いない。

※補充的な指導を受けた生徒は、人物の呼称や色彩の意味を常に考えるようになった。

③作品全体を貫いている物語性の要素を読み取る工夫

作品全体に貫かれている物語性を読み取らせ、ワークシートで学習させた。場面ごとに読み取った内容をつなぐ要素について、発問の工夫が必要である。今回は次のような課題を設定してワークシートで取り組んだ。

・キキは「死んだ」「死んでいない」のどちらだと読み取れるか。読み取りの根拠となる表現に傍線を引く。⇒「死」とは述べられていない。

・キキは四回宙返りを「成功した」「失敗した」のどちらだと読み取れるか。読み取りの根拠となる表現に傍線を引く。⇒成功

作品を貫く物語性を読み取らせると同時に、読み取った内容の根拠となる表現に注目できるように指導することが大切である。

Ⅲ　研究の成果と課題

1　研究の成果

学習指導要領に示された内容は、全ての生徒に対して指導し、確実に定着させなければならない基準である。しかし、国語の授業において、補充的な手だてが必要な生徒や発展的な学習に進んで取り組める生徒に対して、それぞれの習熟の程度に応じた指導がややもすると十分に行われていなかった。また、中学生の時期は、言語能力の差が大きくなる傾向があるが、この時期に生徒が自らの学習状況を把握し、学習の目的を意識して授業に取り組むことは大切である。

本部会では、こうした指導と生徒の実態を踏まえ、研究に取り組んだ。その結果、次のことが成果としてあげられる。

(1) 適切な実態把握が生徒に「読む力」の現状と課題を意識させる

生徒が「読むこと」の学習に取り組むに当たって、学習集団のつまずきを指導者が的確にとらえること、また生徒自身が自分のつまずきがどこにあるのかを認識することが必要である。そして、そのつまずきを克服するために効果的な学習指導が行われ、生徒自身も取り組むべき課題を意識して学習する。さらに、その過程で、生徒が自分の「読む能力」の伸長に気付くことが重要である。

一方、習熟の程度の高い生徒にも、その程度に応じた学習指導や課題が必要であり、生徒が学習する過程で自信や成就感を得られるようにする。生徒が自らの学習の実現状況を把握し、「読む能力」の伸長に気付くような指導の工夫が求められる。

(2) 個に応じた適切な課題設定が学習意欲の向上につながる

国語の授業において、生徒の習熟の程度の差への対応が大きな課題と考える。本部会では、生徒の程度の差に対して、Ａ・Ｂ・Ｃの３段階に応じた学習指導を行った結果、学習意欲の喚起や学習課題への意識化が図られた。

2　今後の課題

(1) 読みの力をどう統合していくか

「文章の内容を正しく要約することができる」ことは、学習指導要領の第１学年の指導内容である。要約する力を身に付けさせることは、生徒が総合的に読む力を身に付けていく過程のねらいの一つである。そこで、中学校三年間でこうした力を確実に身に付けさせるために、意図的・計画的に指導が展開されるよう系統的な年間指導計画の作成が求められる。

(2) 生徒に自分の読む力をとらえさせ、学習意欲を喚起する評価力をどう付けていくか

自らの読むことの学習の実現状況を把握した生徒が、進んで目標を立てて学習し「読む力」を伸長させるとともに、今後の学習への意欲を喚起する自己評価力を身に付けていくことが課題である。生徒が進んで課題を見出そうとしたり、取組を工夫したりするよう、丁寧で継続的な指導を繰り返し行うことが大切である。